栗利用

〔和漢三才圖會八十五果六〕栗○中略

凡栗材埋土不朽也、勝於楠槇之輩、然木不甚大不堪爲板、唯爲塩塀之柱佳耳、

〔廣益國產考六〕栗丸太

國々にて杉檜松槻等の材は多く仕立れども、栗材を出す事少きやう覺ゆる也、此栗材すくなきゆゑ、杉丸太、松丸太抔多く用ふる也、雨かゝり或は溝などに栗を用ひなば、つよくたもつ事、杉松よりも強かるべしと思ふ計にてぞ過しける、江戸抔にては、別て屋敷方の板塀溝などを見るに、杉丸太を打貫き伏、塀の扣柱に杉松など見及べり、是は栗材すくなく高直なるゆゑなるべし、江戸にては諸侯方の御下屋敷抔には、雜物ばかりを作付ありし所見及ぶ事多し、其時々に斯る所にこそ、杉と栗材を仕立給はゞ、諸屋敷の溝々計にても栗丸太を用ひ給はゞ、如何計の御費を省給ひなんと、人にも語りし事あり、又或下屋敷に參りし事ありて見及び侍るに、多く南瓜（はうとう）西國にぼう）ぶら、上方にてなんきん、江戸にてたうなす、或國にてはかぼちやといへり、などを作り、皆百姓に任せ置給へり、是等には杉と栗檜などつくり給はゞ、材木を貯置給ふ道理にて、急用の時伐用ひ給はゞ、如何計の御德用ならんと思へり、○下略

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年正月二十日丁酉、先是常陸國鹿島神宮司○中略又言、鹿島太神宮總六箇院、二十年間一加修造、○中略伏見造宮材木多用栗樹、此樹易栽、而復早長、宮邊閑地、且栽栗樹五千七百株、榲樹二十四万株、望請付神宮司、令加殖兼齋守、太政官處分、並依請、

〔和漢三才圖會八十五果六〕栗○中略

栗實鹹温　作粉食勝於菱芡、但飼孩兒令齒不生、小兒不可多食、生則難化、熟則滯氣生蟲、但日中曝乾者下氣補益、

〔撮壤集下菓子〕杭和名類聚（カチクリ）　搗栗同（カチクリ）